

当世噺家気質 春風亭柳橋と「干物箱」

今年1月に亡くなった九代目春風亭小柳枝（1936~2024年）は、落語芸術協会（通称「芸協」）では古典派の大看板だった。あの独特の歌い上げるような名調子で、トントンとスピーディーに演じれば、誰も振り向かないような地味な噺でも、陽気で華やかなネタに生まれ変わった。だから、芸協の後輩たちは競うように小柳枝に稽古を願った。

「一時、うちの協会の若手は、ほとんど全員と言っていいくらい、小柳枝師匠に何かしら教わっていたなあ。ある時、若手の会に助演でやってきた小柳枝師匠がネタ帳を見たら、自分が教えたネタのオンパレード。『何だ、俺のやるネタがねーじゃねえか』とぼやいてました」

そう言って懐かしそうな顔をする当代春風亭柳橋も、「小柳枝学校」の生徒だった。

「私の師匠・七代目柳橋（1935~2004年）の振出しは三代目桂三木助だったでしょ。三木助のところの弟子は『寿限無』『たらちね』『初天神』の順で教わるのが決まりでした。私もその三席を覚えたら、『これからは外で稽古しろ。まずは小柳枝さんのところへ行ってこい』って」

その時、「『10時に来い』と言われて、10時に行っただめだ。1時間前に行って、おかみさんの手伝いをするんだ」と師匠から厳しく言われた。その言葉通りに、約束よりかなり早く小柳枝宅を訪ねたら、まだ寝ていた。寝ぼけ眼の小柳枝は先代柳橋の教えを聞いて苦笑いした。

「本当はそうなんだけど・・・、俺んところは（時間通りで）いいんだよ」

小柳枝の稽古は丁寧で、高座さながらに2回続けて演じてくれる。ありがたいやら、申し訳ないやら。

「ところが、家に帰って録音テープを聴くと、師匠はものすごく早口なんですよ。対面で聴いてると全然気にならないのに、テープで再生すると早い早い。回転を落とさないと聞き取れないぐらいなんです」

そんな稽古を何度繰り返したか。小柳枝は当代柳橋には本当に親切だった。

「俺はな、そっちの師匠（先代柳橋）から商売になるネタをたくさんいただいた。だから弟子のお前には全部返さなきゃと思っているんだ」

得意にしていた「干物箱」も、稽古を願ったら二つ返事で教えてくれた。若旦那が本屋の善公のボロ家を訪ねて身代わりを頼む時のテンポの良いやりとり、若旦那の部屋にこもって妄想に耽る善公の弾けぶりなど、心地よい音楽を聴いているようだった。

芸協のバンド「アロハマンダラーズ」でも一緒になった。ボーカル&ウクレレの小柳枝が歌う「君といつまでも」が忘れられない。

「小柳枝師匠は高座でもバンドでも、見事に歌っていたんですね」

後年、「お前は先代の弟子なのに十八番の『崇徳院』をなぜやらないんだ。いつでもうちに来い」と言われていたが、小柳枝が倒れ、稽古は叶わなかった。それが心残りだという。（長井好弘）

☆ 長 井 好 弘(演芸評論家)

1955年8月10日、東京・江東区深川新大橋生まれ

元読売新聞編集委員。都民寄席実行委員長。

浅草芸能大賞専門審査員。

『僕らは寄席で「お言葉」を見つけた』

『新宿末広亭のネタ帳』

『寄席おもしろ帖』

ほか著書・編書多数。

TBSテレビ主催 第五次「落語研究会」プログラムに

2003年3月から「当世噺家気質」を執筆中